エッセイ

岸本先生の副専攻

― 昭和二〇年・三〇年代の研究室 ―

井　門　富二夫
（昭和２９年大学院修了）

かには常に自らの甲羅にあわせて穴を掘る。自分の体験のみから過去をなつかしみ、過去を語る者の、その心の狭さを笑わずに彼の穴を掘る試みを何卒寛容に眺めて下さることを望みつつ、このエッセイを書く次第である。

来年になれば停年となって国立大学を去り、再び私立大学に移ろうという筆者である。今さらの感はぬぐえないが、その筆者が学問的基礎を築くのに殊更にお世話になった先生方をふりかえってみると、石橋智信、岸本英夫、大畠清、小口偉一、堀一郎各先生、そしてアメリカではＳ・ミードとＪ・Ｌ・アダムス両先生の名がすぐにも思い出されるし、また筆者の副専攻とでもいうべき、比較文化学や比較教育学では、天城勲、古野清人各先生や、Ｌ・ウオーナー、Ｔ・パーソンズなどという大権威（本当は教室の片隅でおそるおそる先生方の姿をおがんでいたというにすぎないが）の名が浮かんでくる。

今でも築波大学の研究室に置いてある筆者の卒論草稿をみると、字数からみて確かに二千枚程度の、柄ばかり大きくて内容の薄い卒論であった事実がわかるが、石橋先生のお声がかりということもあって、小口先生が貴重な蔵書をミカン箱に二函も二年間にわたり貸し下さったそのお蔭で、とにもかくにも、枚数だけでも多くできたというのが真相である。卒業してすぐに東洋文化研究所の小口研究室（であったと思う）に、リヤカーをひいて先生からお借りした文献を返却しに赴いた時の、その重さがまだ記憶の片隅に残っている。

先生方から被った御恩の中でも、とくに岸本先生の、そしてアダムス、天城両先生の影響は筆者の今日を築くのに大きいものであった。岸本先生の宗教学上の業績や研究生活については、常に先生の身辺におられた脇本、柳川、田丸、高木（きよ子）各先生が最も詳しく御存じであろうが、岸本先生の幅広い活動の中で、副専攻分野ともいうべき大学行政、宗務行政の研究、そして地域研究や行動科学など学際分野の開拓などについては、赤司道雄、野村暢清、大塚喬清、小野泰博の各先生が深くかかわってこられたが、今にして思えば、自分で考えていた以上に、筆者も早くから先生のこの分野の活動を支える一翼を荷っていたように思える昨今である。

いずれにせよ宗教学研究にも話はかかわってこようが、小論では岸本先生のこの副専攻分野へのかかわりが、筆者たちのその後の学習や研究にどれほど大きな影響を与えたかに限って、研究室片隅での記録程度の重要さしか認められないであろうが、述べてみたいと思う。終戦直後から昭和二三年頃まで、筆者は横浜のアメリカ領事館で臨時日本語教師というアルバイトを持っていた。日本円で支給されるはずの給与は一切受けとらないかわりに、給与相当分の米書購入を認められていたが、自分のための文献以外に、岸本先生と英文学の斎藤勇先生から依頼をうけた新刊を購入しては先生方のお宅に届けたこともあった。岸本先生にはフロムやリントンを、斎藤先生にはＰ・ミラーの本などを届けた覚えがある。それが縁となって、当時日比谷にあったＣＩＥ図書館へ、岸本先生がかかわっておられた新制大学制度創設の為の、参考文献を先生の命のままに何度か読みに出かけた覚えもある。（拙著『大学のカリキュラム』玉川大学出版部、参照）。これが筆者の岸本先生の副専攻へのかかわりの始まりであるが、その後、地域研究という新らしい学際課程の移入と東大教養学部創設に大きな役割を果したスタンフォード・セミナーの発足に当っては、高木きよ子さんと共に三年間にわたって参加を命ぜられたのも、多分、ＣＩＥ図書館でのお手伝いや原書購入にかかわる

筆者のアメリカ文化への関係にあったものと思う。

卒論で使用した方法論がウェーバー（宗教集団論の面で）とフロイド（向心論のため）であったこともあって、大学院では、その頃から行動科学に足をふみいれられていた岸本先生の指導で、主として象徴的相互作用主義のG・H・ミードらや、フロム、サリバンら精神分析学左派の原書をゼミで担当していた。脇本、赤司両先生をはじめゼミに出席しておられた先輩方はよく覚えていて筆者を屢々からかわれるが、ミードについてもフロムに関しても筆者の報告はなっていないと、岸本先生に何度も読み直しかつ再報告を命ぜられて泣いたのもこの頃である。しかしこの苦労のおかげで、象徴的相互主義学派の牙城であるシカゴ大学に、後にフルブライトを通じて留学できたものと思うが、直接には、昭和二九年頃、シカゴ大学で行動科学に関する学際委員会が結審したので、留学するならシカゴがよいと岸本先生にすすめられたのが、シカゴ行きの動機であった。

この昭和の二〇年代というのは学問界にとっては、まさに驚天動地の変動が次々と生じた時期であった。自然科学の分野で原子物理学や電波学などの新らしい流入があり、人文・社会科学の分野では、研究「対象」にかかわる学際学のために（文化・文明という用語には優劣にかかわる偏見もまじるというので）「地域」研究という用語が導入され、また個々の学者がカバーできる小社会・小文化の研究を中心にしてきた文化人類学に対し、学際的協力においてしか扱えない大規模文化の統合的研究 ── 但し社会科学分野 ── として、「文化学」「比較文化学」「国民性研究」（テネックスやリントンのいう、いわゆるculturology ）などがエンブリーやベネディクトらの業績と共にどっと紹介されもした。また研究「方法」を中心とする学際課程として、人類学・社会学・心理学・生物学などを統合する形で人間行動を把握する行動科学が導入され、アメリカより帰国直後の南博先生が、岸本、小口両先生の紹介によってわれわれ院生一同を指導された事実も、はっきり記憶に残っている。岸本先生はこうした学際学導入の中心人物であった。確か昭和二六年頃に文化人類学講座が東大にも新設され、杉浦健一先生が初代教授になられたように覚えているが、既述したように岸本先生の活動をめぐって、行動科学への関心（これが筆者らに対して、先生がミードやフロイドをゼミで課された一つの動機であったと思う）が研究室でも高まり、人類学や社会学分野の人々が宗教学研究室に集まってこられたのも覚えている。放送大学の祖父江孝男教授の思い出（「社会人類学年報」二巻、１９７６年　弘文堂　杉浦健一の項参照）がこの辺の事情をよく物語っている。なお地域研究に関する岸本先生の早くからの関与については、筆者が詳しく「アメリカ研究資料センター年報」（第三号　１９８０年、宗教特集）に報告しておいたが、宗教学畑の最近の学生諸君が、以上のような他分野での報告を読んでくれているかどうか、心もとなく思う昨今である。

なお、こういう新展開の分野、たとえば地域研究、行動科学などに関する調査やフィールド・ワークへの参加も、未熟な院生であった筆者にも岸本先生はさかんにすすめられた。昭和二〇年代半ばに、名古屋大学の村松常雄教授（精神医学）の主催される「日本人の性格」調査に参与して、ここでカリフォルニヤ大学のデ・ヴォス教授や若かりし頃の我妻洋、星野命という人々とも親しくなれた。ひきつづいて、小口先生、南先生の御指導によってユネスコの「ソーシャル・テンション・サーヴェイ」に参加して、赤岩栄の上原教会をめぐる社会的緊張分析に２年間をすごした。学問的にははるかに先輩であるがしかし同級でもある高木宏夫さんに手とり足とりで社会調査方法を教えてもらったのもこの時である。調査の基礎的方法や行動科学の動向についてこの二つの調査で諸先輩から徹底的に仕込まれたように思う。

文献分析については、岸本・大畠両先生の直接指導の下に、そして戸田、脇本などというこわい諸先輩の批判をうけながら、開国百年記念会の『明治文化史　宗教篇』（洋々社）の、キリスト教史約二百頁を担当させてもらったが、これもまた、あるいみでは地域研究にかかわる応用訓練であったと思う。留学前のこういう訓練の最後の仕上げが、日本学術会議の「宗教学文献目録」編集の仕事で、現実には先生方、諸先輩方が十人以上も参加されている大がかりな作業であったが、留学前の資金稼ぎについて同情をよせられた先生方のおかげで、実際に資金のほとんどを筆者一人がいただいて、当時は上野にあった国会図書館にこもりきってカード作成を受持っ

たものであった。以上のように院生時代にうけた訓練のおかげで、シカゴ大学に出向いてからは、人類学のフィールド・ワークでも、文献探索（シカゴ在学中に作成したリストが、後にＩＣＵより出版された『プロテスタント英文文献目録』となった）でも、あまり苦労をした覚えがない。そのいみで、初期の岸本・大畠時代の宗教学研究室の教育の質の高さに誇りをもつ筆者である。

同じ二〇年代の半ばには、新らしく展開する諸科学について目を開かせるという意味で、岸本先生は海外留学をさかんにすすめておられた。国学院の平井直房、立教大学の赤司道雄らという諸先輩につづいて筆者や田丸さん、安斎伸さんらが海外に出たが、この伝統は今に至るまで東京大学宗教学研究室で続いている筈である。築波大学の宗教学の学生にも筆者は例外なく留学をすすめているが、海外に出て自らの学問を反省し、広い視野から課題を眺め直す機会をもつのは重要なことと思う。

筆者がシカゴに赴く昭和二〇年代末には、認知科学の先駆であった異文化交流学が心理学を基礎に広がり、そして不協和認知やコンフリクト分析の一種の現象学として国際関係論がわが国でも広く展開してくるが、文化・社会を主体とする関係・協応現象を扱うこういう分野にも岸本先生はかかわっておられ、昭和二九年、筆者がフルブライト試験に合格した際には、シカゴにはモーゲンソーという国際関係論の権威がいるから、国際関係論で宗教がどんな役割を果しているかを考えるためにも彼の講義も聴講するようにと、岸本先生はつよくすすめられたものである。そればかりではない。行動科学については、ブルマー（彼は残念ながらカリフォルニアに移っていたが）やシブタニらに教えを乞うようにとの指示もあった。こういう御指示があったので、筆者は神学大学院で学位コースに進学してアダムス先生につくと共に、社会科学大学院では研究員として数多くの権威のクラスに参加したが、１９５０年代は「豊かなアメリカ」の時代であって、大学から二種類の奨学金をもらうという好運にありついていた。人類学のフィールドワークに、オザーク地方やウインスコンシンの調査に参加させてもらえるというチャンスにも恵まれたが、他方、１９５６年からはミッドヴィル神学寮やカレッジ寮の寮監を勤めて、岸本、宮本、堀各先生らや、その他各分野の大先生方に滞在の為の部屋、アパートの世話をさせていただく役柄にもめぐりあわせ、世界各国の学者に顔と名を覚えていただいたのも予期せぬ好運であった。今は亡きエリアーデ先生のフランス語か英語か判然としない会話をはじめて耳にしたのも、１９５６年ならば、今や大権威の名をほしいままにするマーテン・マーティらがまだ博士論文と取り組んで苦労していたのもこの頃である。

1960年代となると、筆者は教師としてアメリカに何度かもどることになるが、そして出会うのが、あの「暑いアメリカの夏、すなわち黒人暴動」と、「イチゴ白書すなわち学生騒動」であるが、この頃となると岸本先生がまだこの世におられた五〇年代と全く様がわりして、学際研究諸分野の成熟時代となり、世相表面の騒がしさとは逆に、学際研究にかかわる方法論にもある種の落着きと統合が観察され始める。この頃の学界の事情については、いま筆者が五年ごしにまとめている『比較文化論の展開』（仮題、東大出版会予定）に詳しく述べているので省略し、小論では、ふたたび１９５０年代半ばにもどって、次には岸本先生のもう一つの副専攻、宗務行政と大学行政にかかわるさまざまな研究に筆を及ぼしてみたい。

英語についてもネィティヴ・スピーカーなみの岸本先生であり、そのうえ宗教学研究者であって、かつアメリカの大学での体験も深い人物というので、ＧＨＱ側も日本政府側も、宗教行政や大学行政にかかわる改革については、いちいち岸本先生に交渉仲介の役割をおしつけていた様子が、終戦直後には社会の末端にいるわれわれにも、何とはなく理解できた。学部学生であったのにアルバイト先に通う無料パスを与えられていた筆者を、ほんの数度ではあったが先生はＧＨＱへの使いとして利用されたこともあり、その際に野村先輩や田島信之先輩が、岸本先生関係の領域で働いておられるのを垣間見た覚えもある。昭和２０年代後半には、同級生の（とは名のみで、実際は人生体験の上では先輩であり、時には私の師となってくれた）大塚喬清さんが岸本先生の御指示もあって文部省の宗務課に勤務されるようになったが、当時の文部省は年度末毎に不用となった資料や文献を廃棄・焼却のため廊下にほうり出して

いた。大塚さんのおかげでこのうちさしつかえないと判断された資料のみ、昭和二六年頃から東大図書館と研究室にひきとらせてもらえるようになった。今日、東大や筑波大の片隅に残る戦後宗教史の諸資料は、以上のような経過をへて、毎年リヤカーをひいて東大から文部省に通ったわれわれ院生の手によって運びこまれたものである。

アメリカ留学五年という時間的ギャップをせおって帰国した筆者には、もはや文部省の名は遠いものになっていたのに、帰国した翌日、岸本先生によび出され、翌昭和三五年から全国規模の宗教団体調査が始まるので、お前は文部省に入って専門職として調査を担当するようにと告げられた時には、事の意外さに絶句したものであった。アメリカでもすでにシャイマー・カレッジなどに職をもっていたのを棄てて帰国したのにと口をとがらせて不平をいう筆者に、「宗教学」の研究者は専門の課題（筆者の場合、アングロ・サクソン宗教）以外に、比較宗教ができないと一人前とはいえないし、特に筆者の場合、日本宗教について無知に近いのでは困ることになるから、この文部省の調査で勉強し直せと、岸本先生は教師として諭して下さったが、海外呆けの当時の筆者には教師のこの恩情が理解できなかったようである。（当時をふりかえって、自分自身の馬鹿さ加減に人知れず顔を赤くして、恥じいることが、今日でもしばしば起る）。そして本来なら、公務員法違反すれすれのことであるが、やはり日本宗教について勉強し直しのいみをふくめ、同時に国学院大学神道研修部と東京神学大学で非常勤講師のポストをいただいた。この宗務課専門職は、実質的には大学の助教授職に当るものではないかと今日では私にも理解できる。戦前の文部省の宗務官、神祇院調査官の伝統をひくポストであり、当時からの伝統を眺めてみると、平泉澄（のちに東大）、豊田武（東北大）、村上豊隆（神戸大）、相原一郎介、深川恒喜（学芸大）、井上恵行（駒大）、梅田義彦（東海大）各先生のような一流の学者が、そしてわれわれの先輩が名を連ねておられ、戦後になってわれわれ以後も、大学の助手職経験者か海外留学経験者のみがこのポストを継いでいるようである。筆者があわただしくこのポストを去った後も阿部美哉（放送大）、洗建（駒大）、松野純孝（上越教育大）、竹村牧男（三重大）各氏らと、さまざまなタイプの学者がこのポストを踏み台に学問界へと飛躍してゆかれたものである。

但し、筆者の前そして後にこのポストにおられた方といろいろな点で比較してみると、当初は急にもち上った「宗教団体類型調査」「外国宗教行政調査」実施のためにある種の臨時職として筆者は就職したのではないかと思われるふしがある。それはさておき、筆者はここで再度、願ってもない好運と出会うことになる。今日でこそ文部省には阿部美哉さんクラスの語学の達人が数多くおられるが、第一回安保騒動当時には何とか通じる外国語会話をあやつれる者があまりいなかったこともあって、職につくと同時に、筆者はユネスコ文部大臣会議や国際図書館会議の世話や、フルブライト選考委員会、ＡＦＳプログラム実施委員会の委員をおおせつかり、そういう機会を通じて岸本先生が早くから抱えこんでおられた国際交流の仕事の大半を、お前にまかせるとゆずられる（こんな用語が適当かどうかわからない。むしろ小使い仕事に使われたという方が適切か）ことがあった。と同時に、比較教育制度についても勉強せよと指示されて、この時に副専攻の恩師、天城勲先生に岸本先生から紹介された。当時すでに調査局長であり東大講師であった天城先生には、アメリカの大学制度についての詳しい研究・調査を命じられたが、このように考えてゆくと、文部省で「事務」と称するものにたずさわった経験があまりないことに気づいて筆者はがく然とすることも多い。

昭和三五年当時、安保騒動と同時に伊勢・靖国国家護持問題が起っており、「宗教団体」の定義を議会から求められたことがあった。そのため、「宗教団体類型調査」「外国宗教行政調査」が巨額な予算を得て実施されたが、この時から憲法に規定される政務分離の原則にそうて、文部省は宗教調査の主なるものは、第三者としての研究機関である大学に委嘱するという原則を固めたのである。団体類型調査の実施委員には、柳川・森岡（清美）両先生という、実は筆者の仲間うちの研究者になっていただき、調査の実施については、まるまる２年間、筆者が全国を馳けまわるということになったが、この事情の裏に岸本先生がおられたのは周知のことである。また同時に、岸本先生を中心に「宗教の定義をめぐる諸

問題」委員会を組織したが、その実態は、当時はまだ新進の学者とみなされていた脇本、赤司、藤田、柳川各先生を委員にして筆者が世話役・事務方をつとめるという、まるで東大宗教学研究室の移動研究会というようなものであった。しかしこの時のさまざまな議論を基礎にして岸本先生の後の『宗教学』（大明堂）の第一稿ができ上るわけであるが、議論などという上品なものではなく、岸本先生が討論のためにつくられる原稿について、とくに脇本、藤田各氏がさんざんに先生を「つるし上げる」といった激烈な研究会であった。批判される度に、そうかそうかと内容を訂正してゆかれる岸本先生の温顔をいまもなつかしく思い出す。

この頃、神道界や新宗教界の一部には、岸本先生をＧＨＱに屈従したアメリカ的リベラリズムの御用学者とけなす人々がおり、逆に左翼政党関係の研究者は先生を保守的宗教政策の大黒柱と批判していたようである。今思いかえせば、先生の立場はまさに宗教学的な中庸の立場であり、またある面ではデューイばり（『誰でもの信仰』参照）の理性的政教分離論者であったと思う。各調査を通じて得た結論として、先生は宗務行政は多様な宗教団体に対し「啓蒙のための説得の行政」以内に留まるべきであるし、宗教団体はその多様性の相互維持においてこそ（究極なるものに対向する謙虚さと、自己主張への自信という矛盾において）、究極なるものへの信仰を人々に説きうると考えておられたと思う。

筆者に何度か説明されたこともあるが、神社神道は文化の枠組でもあり、マジョリティの信仰でもあり、それは維持されてこそわが国の規範妥当性も維持されるが、それがマイノリティの宗教やイデオロギーの障害となるというならば、両者の性格が両立できる状況を、裁判（いわゆるデュープロセスを通じて国民にその状況について説明する処置・方策）を重ねて辛抱づよく築きあげてゆく必要があるというのが、先生の理解であったと思う。それは先生の宗教の定義（『宗教学』参照）――宗教は文化の一要素であり、政治・経済などと同様、人間の営みの必然的産物――にそのままもとづく解釈であったと思う。他の宗教への思いと共に神道に対する先生の深い思いやりは、キリスト教からの出身者である筆者にも、そのまま同情をもって受けとれるものがあった。こういう岸本先生への筆者の郷愁は、宗教学の行動科学による研究に筆者をいまも執着させている動機となっている。（筆者の『神殺しの時代』や、最近の論文「世俗社会での宗教的際能」東洋学術研究２６巻１号を参照のこと）。

岸本先生御昇天後、筆者は天城先生のお世話をうけて、再びアメリカへ渡り、教師生活にもどることとなる。しかし宗教学研究上での岸本先生の影響は当然のこととしても、天城先生の指導を通じてその後は、地域研究、国際交流学、比較教育学などという岸本先生の副専攻であった諸分野に、より深く筆者は入り込むことになった。

文部省のお世話になった短い間にも、天城先生が皮肉られる通り（しかし本当は天城・岸本両先生の御配慮によるものであったが）、公務員法違反すれすれに、東京大学（三つの学部・研究所）、津田塾大学、神学大学などなど六大学で講師をつとめ、またアメリカで専任の教師となって働き、また他方では大規模な宗教調査の担当者として全国を走りまわり、その間にはキリスト教界の伝道圏調査や東本願寺同朋教団・西本願寺門信徒会の組織に立ちあい、何とか日本宗教の基盤の学習を終えることもできた。

これがいま停年をむかえようとする筆者の研究の基礎となったものである。結論としていえることは、仮に筆者の研究に多少の独自性があったとしても、それはすべて岸本、アダムス、天城各先生方の指導の思惑の内で生じたものにすぎない。これがこの年齢になっての、筆者の郷愁を生み、その故郷への思いには、先生方先輩方のお顔とそしていつも頼り甲斐のあった同級の人々、柳川、藤田、安斎、大塚、浅野、高木（宏夫）といった人々の名前が付随してくる。恵まれた研究者生活であったというのが結論である。

センチメンタル・ジャーニーとしてのこの一文を寛容に受けとっていただきたい。人間は年をとると共に、ある時期はこうした郷愁にひたりきり、そして再び新らしい旅路につく里程標を探し始めることとなる。この一文はいかにも個人の体験にもとづく発想によるものであるが、真意は宗教学を人間学としてまた行動科学として再編する一つの契機をつくられた岸本先生の学問上の幅広さに、いま一度ふれてみたかったまでである。政治学・経済学・教育学

などという従来のデシプリンは、宗教学同様、研究対象を限定してそれぞれの学問的方法を特定しようと試みる旧来の学問であったと筆者は言いたい。今日の学問は、分析方法それ自体について人間の行動や思想的統体に関する視角を設定して、ついで研究対象として人間文化のどの部分（宗教ならそれに重点的に光をあてるのみ）を重視して人間そのものの研究をすすめるかという、一種の学際学の方向に走っていると筆者は考えている。『大学のカリキュラム』という拙著にこうした考えを述べてみたが、その著想は三〇年前に岸本先生の主催された「宗教の定義」をめぐる研究会で与えられたものである。

宗教学、宗教学と叫びたて、それなりに独自の学問的方法があるかの如く主張することには、筆者は反対したい。政治学などの他のデシプリンと同様に、研究対象として宗教とよばれる人間現象に、特に焦点をあてているだけの人文もしくは社会科学にすぎないというのが、岸本先生から与えられた筆者の印象である。この観点にたてばエリアーデの学問は、現象学もしくは哲学的人間学よりする宗教の研究といういみで宗教学であるだけの話である。岸本先生のお名を「虎の威」の形で借りて自己主張をしてみたが、‥‥この何とも言えない郷愁、昭和二〇年代の東京大学宗教学研究室への郷愁を、今の学生諸君にどのように説明してよいのやら‥‥。脇本先生、柳川先生、このセンチメンタルな言及を笑いさらずに、岸本時代について今一言、何かつけ加えていただけないものでしせうか？　妄言多謝。